

## あとがき ―― 命の輝き

「一寸先は闇」という言葉がありますが、自分に限って、我が家に限って、と思っていた私にとって、それはまさに真実でした。

また、「朝の来ない夜はない」という言葉もありますが、それもまた真実でした。深く暗い闇の中でいつ訪れるかわからない朝を待ちわび続けていました。しかし、気づくとそんな私にも希望の朝が訪れました。私を囲むたくさんの方々の愛が、私の命に再び光を与えてくださったのです。

笑顔が戻った今だからこそ言えることですが、苦難にどう向き合い、どう乗り越えるかは自分次第。結局のところ自分の力で乗り越えるしかないと思うのです。しかし、自分ひとりではとても乗り越えられない苦難もあります。そんな時は、自分が一生懸命に生きれば、必ず周囲の人が応援し励ましてくれることも知りました。

たくさんの苦難を乗り越えてきた今、私の心は毎日幸せでいっぱいです。幸せが心から溢れ出ているかのようです。その幸せは特別なものでも何でもありません。こうして楽しく家族そろっておいしい食事ができること、出かけられること、友だちと心の底から笑いあえること、新緑のまぶしさに感動できること、そして夫、杏子といつも一緒にいられること…。いろいろなものを手に入れても幸せに満たされていると思えなかった私ですが、今となっては日常生活すべてのことを幸せと感じられます。

なぜならば私はあの日を境に、この目の前にある大切なものすべてを失っていたかもしれないからです。あの時にこの世を去っていたら、私を囲むたくさんの笑顔にはもう会えなかった、何よりも杏子には出会えなかったのです。人間の幸せって、こんなにも素朴で身近なところにあったのかと感じています。

そして、障害を負ってから、以前に増して、出会いを大切に考えられるようになりました。それは、事故に遭遇してから今まで素晴らしい出会いに恵まれ、その出会いをきっかけに人生が豊かになったように感じるからです。恋人に限らず、きっと人と人との出会いは運命だと思います。

障害を負ったからこそそのたくさんの素敵な出会いに感謝しています。その出会いこそが私を笑顔へと導いてくれました。きっとこれからも素敵な出会いがたくさん待っているはずです。その出会いをいつも大切に生きていきたいと思っています。

そして、これから待ち受けている苦難から決して逃げずに、何よりも自分を信じて前を向いて生きていきたいと思えます。

最後になりましたが、私を支え、そして支え続けてくださっているたくさんの皆様に心からの感謝の気持ちを込めてこの本を捧げます。

出版の機会を与えてくださった大谷貴子(骨髄移植で白血病から生還し、全国骨髄バンク推進連絡協議会会長などとして奔走されています)さん、最初は戸惑いながらの執筆活動も次第にやりがいを感じながら書くことができました。新たな世界が広がりました。貴重な機会を与えてくださりましてありがとうございました。

また、大谷さんのご紹介で出版をお引き受けくださり、大変丁寧に原稿執筆のアドバイスや本づくりをしてくださったあけび書房の久保則之代表はじめ清水まゆみさん他スタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

2009年9月

又野 亜希子